

＊ 大学出版部協会創立五〇周年

新たな道を切り拓く

理事長就任によせて 黒田拓也

I

記念講演

知と生命の大地を耕す

大学出版会のミッシェンと《教養》の未来 亀山郁夫

3

遙かなる専門書の世界を伝えるために

営業の日々と役割、そしてこれからのこと 中島久暢

12

書評で読者を広げる

ブックフェア「レビュー合戦」を企画して 澤畑壘

14

インタビュー

学問の面白さを読者へ

名古屋大学出版会・橘宗吾氏に聞く

18

＊ 連載

初版本、ナンセンスなフェイシズム

谷崎潤一郎著『新槩 春琴抄』『鍵』 酒井道夫 表2

大学出版部ニュース

25

JAPANESE
UNIVERSITY
PRESSES

NO. 96
2013
AUTUMN

NO. 96
2013.10
＊秋

50th
Anniversary



一般社団法人
大学出版部協会

THE
ASSOCIATION
OF
JAPANESE
UNIVERSITY
PRESSES

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク
大学出版

初版本、ナンセンスなフェティシズム

谷崎潤一郎著

『新契 春琴抄』『鍵』

酒井道夫（二代目酒井九波堂）



手前が『新契』の、赤く灼けて変色はなはだしい更紙の本文。函（左）も相当くたびれている。右は、棟方による色鮮やかな表紙と見返し、単色ながら多数の装画で彩られた『鍵』。贅沢なつくりだが古書市場では供給過のようで、初刊本が文庫本より安価で入手できる

「新契」とはまあ難しい単語を使ったものだが、手元のちよつとした漢和

辞典では出てこない語だ。「新編」というほどの意味か？「春琴抄」の初出は昭和八年のことらしく、以後、「新契」の刊行前後にも別の作品との組み合わせで数種の単行本が刊行されているらしいが、未見。

『春琴抄』のあらずじは、何となく知っていた。名作だからといって文庫本等で読まされたことによるのか、あるいはもつと違った形でのダイジェストめいたものを読んだからなのかも知れない。何度か映像化されたはずだが、これも観ていない。谷崎とは波長が合わないと思っていたからだ。

それが、割合近年になってから、何処かの古書市でこの『新契』（創元社一九四一、装丁・樋口富麻呂）と出会ったのだった。美本とはほど遠く、くたびれたヤレ本だった。しかし、そのやるせなさそうな佇まいに惹かれて購入。当然、めつちや安かった。頻繁な繙書の結果で傷んだ風でもなく、用紙等の資材が刊行時の時代を反映して決定的にうらぶれているのだ。一応、見返しや扉にはそれなりに吟味したらしい和紙が使われていて、当時としては精一杯頑張った意匠なのだろう。そして、その切ない出来にほだされたせいか、読むはずでもなかった『春琴抄』に引き込まれて……読んでしまった。

「五号明朝字間四分アキ、行間全角アキ」。この組みでこそ流麗な味わいを発揮する文体だ。無駄な言い回しは一切ない手練の語り口を支えるに相応しい版面。でも、こんなこしらえものの話を、名作だからといって年端もいかぬ青少年に読ませるのも無理があるよな！

ついでに、戦後の刊行でスキャンダラスな話題を振りまいた豪華な造本の『鍵』（中央公論社 一九五六、装丁・挿画・棟方志功）をこの歳にして初めて読んでみたが、これも若者が読んで面白く思う本ではないな！。素直にエロい本なら他にいくらでもある。しかし、これも字間四分アキの組みが絶妙。どうせなら当時の刊行本を手にとって読みたい一冊だ。

■ 大学出版部協会創立五〇周年

新たな道を切り拓く——理事長就任によせて

黒田拓也

(大学出版部協会理事長・東京大学出版会)

グローバル時代における大学教育のあり方について、大学内外で議論が活発になされている。ここでは学事歴の見直しやすいかにして学びの質を向上させていくか等、制度面の変革も含め総合的な転換が起こっているといつてよいだろう。

母体校を中心に、大学という場に寄り添うかたちで出版活動を展開する大学出版部にとって、そうしたさまざまな局面における大学の変化を認識し、具体的な出版物に成果として反映させていく必要があることは当然であるが、その変化がいかなるかたちで進んでいくかは、いまだ不透明な点も多い。

一方で、出版活動を継続していくには、製作した出版物を確実に流通させ、多くの読者を獲得することによって再生産に振り向ける原資を稼得していくことが必須である。十数年前から現在に至るまで出版市場は大きく縮小してお

り、企画―出版―市場展開―収益確保―企画―出版……といった連環をある程度の規模で維持していくことは容易ではない。

大学と出版市場の大きな変化の中で、われわれがいま、意識しなければならぬポイントは何か。ここでは、①情報流通の変容と②出版の捉え直し、という二つの点を考えてみたい。

①は容易に想像できるようにデジタル化への対応が中心的な課題となる。分野による進展具合の違いはあるが、eJournalやオープン・コースウェア、リポジトリなど、学術情報流通の大半はデジタル・コンテンツである。学位論文のPDFでの提出が義務付けられたのも直近だ。唯一立ち遅れているのが、われわれの関わる和書^{*}のデジタル展開である。市場が未成熟なことやそれに伴う採算性が不透明なこともあり簡単には踏み込めないのは確かだが、この

市場を整備する努力を怠ると、早晚、新たな発想の下でコンテンツ流通を手掛けるアクターに席巻されてしまう危険がある。

そうした心配はともかく、書籍市場の成長が困難を抱えているなか、学術和書のデジタル・コンテンツ市場を確立することにより、われわれ大学出版部が研究・教育について関わる幅を拡大させていく必要がある。また、デジタル・コンテンツの整備はコンテンツ流通の「国際化」にも大きくつながる可能性が開けることを指摘しておきたい。

②は、①とも関連する部分があるが、読者にとって書籍や雑誌以外からの情報受容が広がっていくなかで、出版することの意味や方策について、いま一度見つめ直してみる必要がある。改めて言うまでもなく、ここ二十数年来、とくに二〇〇〇年代後半以降、書籍の製作プロセスは完全にデジタルの世界になっている。唯一最後の印刷から製本、そして商品として送り出す過程のみが紙を媒介とした「アナログ」なのであって、出版に関わる編集から製作まではデジタルの過程であり、その出口としてそのままデジタル商品として流通させてもなんら違和感はないはずである。ましてやつくりあげたコンテンツの流通可能性が高まる可能性が大きいのであれば、積極的に捉えない理由はない。

となれば、重要なのは、ここまで言及してこなかった「企画」のあり方について、われわれがいかに捉え直していくか、にあると考える。それこそが行き詰まった感のある現

在の出版に新たな展望を開いてくれるだろう。つまり、情報流通のあらゆる可能性を追求すると、著者と編集者が協同で生み出すコンテンツの機能を最大限発揮させるためには、これまでの書籍の形態のみを前提にするのでは不十分であり、それに加えて新たな付加価値を生み出す「何か」を企画の時点で見通しておく必要があるのではないか。この能力をとともに向上させていきたい。

大学出版部協会に加盟する会員社は、組織形態も規模も活動の内容もじつに多岐にわたるものだが、著者でもあり読者でもある多くの関係者を抱える「大学」という場で出版活動をするという共通基盤をもつ者の集まりであり、そこから生み出される良質のものをくみ取り、企画として設計し、適切なかたちで世に送り出す、という「大学出版」のかたちを共有している。新しい出版の核をなすポテンシャルは十二分にある。お互い個性をぶつけ合い、道を切り拓いていきたい。

(*) もちろんいくつかの大学出版部においては、英文図書の刊行を行っているが、全体のなかではまだ一部にとどまっているので、ここでは和書を中心に考える。無論、将来は和書も英文図書も同様の枠組みで展開していきたい。

■ 大学出版部協会創立五〇周年【記念講演】

知と生命の大地を耕す——大学出版会のミッションと《教養》の未来

亀山郁夫
(名古屋外国語大学長)

本日は、演題「知と生命の大地を耕す」に関わるテーマを三つ用意しました。「大学」「出版」「教養」の三つです。

まず、「大学」のテーマについて一言述べるなら、グローバル化の現代において求められている人材育成という観点に立って、私自身が東京外国語大学学長に就任したあと、戦後六四年続いた外国語学部を廃止し、言語文化学部と国際社会学部という二つの学部を作りました。一、二年時の教養課程は、いわゆる「国際教養」に対抗し、新たに「世界教養」のコンセプトのもとに新しいプログラムを作り上げました。大学改革においてもっとも強い関心があったのが、教養教育です。

次に「出版」です。とりわけ大学出版会の使命はどこにあるかを考える際、つねに問題となるのは、その活動が、研究および教育の両面で大学、いや社会全体にどう貢献できるかという点です。

さらに三番目の「教養」——。先ほどの大学改革の延長にあるテーマですが、今や、従来の古い教養主義的立場は否定されるべきだと私は考えています。「教養」の未来は、ある意味で、三つの世代間の闘いと言いたほうが、三代間における断絶をどう克服するかに掛かっています。三つの世代とは、第一に、団塊の世代およびそれよりも上の世代、第二には、バブル世代、すなわちバブル期に大学で学び卒業した人たち、そして最後が現在の二〇代の学生たち、というイメージで捉えられるでしょう。この三つの世代間の「闘争」が、教養の未来、帰趨を明らかにしてくれるだろうと考えています。

今日は、これら三つのテーマを相互に織り交ぜながら、具体的に話してみたいと思います。

「教養」をつくるもの

「教養」は英語で「カルチャー(culture)」と言いますが、私なりに、教養の原点は音楽にあると考えています。非言語的なもの、ただし非言語的ではあるがあるシステムティックなものによって構築される「音楽」、これが根本になれば、教養は単なる言葉だけの上っ面なものとなるでしょう。つまり「教養」という言葉によって、かりに世界の古典文学に関する知識をイメージするにしても、その下にその知識ないし知を裏付ける生命感覚がダイナミックに息づいていなくてはならず、逆に、その息づきがあつてこそ、はじめて教養は生きたものになるのです。思うに、「教養」がたどりつくべき終着点は、理性と本能、右脳と左脳の理想的な一体化にあります。

今日のこの講演タイトル「知と生命の大地を耕す」に重ねて説明しますと、「知」とは、本来的に理性的なものであり、他方、「生命」とは、ある意味で本能的なものですから、その二つを耕し、統合していくのが本来の教養的な知のあり方ということになります。そしてその基盤をつくる統合的なモメントとして音楽を位置づける、というのが私の考えです。茂木健一郎さんの印象的な言葉があります。「いい音楽を聴かないと、いい脳味噌はできない」。あるいは私が若い頃から好きであったポール・ヴァレリーの言葉“De la musique avant toute chose”〔何よりも音楽を〕

にあらわされるような、非言語的世界を常に目指すことによって、人間の言語活動はかえって限りない豊かさを獲得できると信じています。

さて、余談になりますが、今から百年以上前、一八九二年に生まれたロシアの女性詩人マリナ・ツヴェターエワについて少し話をします。私は何年か前、教養をめぐる小さなエッセイを書いた際に彼女の詩を取り上げました。彼女が一七歳の誕生日に書いた「祈り」という詩です。この詩のなかに、「私は一七歳のいま死にたい」と言う一行があります。最初の四行詩を読みましょう。

「キリストと神よ、／私は奇蹟に飢える。／いまこの時、この一日の始まりのこの時／おお、私を死なせ給え／いまだ、生のすべてが私にとって本のごとくあるうちに」
世界と本が、現実と言葉、一対一で対応している精神的な状況、現実と自分の世界がまだ未分化の状態であるこの幸福感に、いつまでも浸っていたい、そしてもしこの幸福感が打ち破られるのであれば、私は死にたい——という内容です。読書という体験のもつ根源性を、これほど鮮明に浮かび上がらせてくれた詩を、私は他に知りません。知と生命、本と世界、言葉と現実、その幸福な一体感を経験させてくれる力、それこそが真の意味の教養なのだ、というのが私の考えなのです。

出版に憧れ、編集者と向き合う

さて、そこで、私自身と本、とりわけ出版について話題を移していきましょう。私が最初に本を出版することができたのは、四〇歳のときです。最初の一冊の出版に向けて、異常なくらい夢を膨らませてきたといつて過言ではありません。まさに執念の道のりでしたし、それほどにも、本を出すということに夢を抱いてきたのです。

一九八一年一〇月、私が三三歳のときですが、池袋の「リブロ」という大書店を訪ねた際、書棚に並べられた膨大な書物の洪水のなかに、自分の本が一冊もないという孤独感を味わいました。そして、ことによると、このなかにか

私の本が並ぶことになるかもしれないと思ったときの幸福感は忘れ難いものがあります。その期待と幸福感には、根拠がありました。私は、当時、奈良県の天理大学にロシア語の教師として勤めていました。翌一九八二年に、池袋の西武百貨店に入っていた西武美術館で、「革命と芸術展」

が催されることになっていました。この展覧会では、日本で初めて、ロシア・アヴァンギャルドの多くの作品が展示され、圧倒的な人気を呼びました。その展覧会の準備をしていた西武美術館の芦野公昭という方が、遠路はるばる奈良の田舎まで私を訪ね、ロシア未来派の作品の翻訳を依頼してくださったのです。その依頼を受けただけでも、夢見心地でしたが、その帰りがけに芦野さんは、私が当時研究していたヴェリミール・フレーブニコフという未来派の詩人について、「本を一冊、書いたらいかがですか」とおっしゃってくださいだったので。運命的な一言でした。あの一言がなければ、私の人生はまるで別のものになったにちがいありません。

その一言で私の情熱に火が付き、いつか、芦野さんが私の本を出してくれると信じ続けて一〇年間、詩人の伝記を書き続けました。それが、『甦るフレーブニコフ』という本です。もつとも、この本は、西武美術館、いやリブロポートという出版社から出版されることはなく、最終的には、

虚妄の 三国同盟

—発掘・日米開戦前夜外交秘史—

渡辺延志

日本を破滅へと導いた同盟成立にまつわる謎と「松岡外交」の内実を解き明かす
迫真の歴史ノンフィクション、四六判 定価2940円

「大東亜戦争」期 出版異聞

—「印度資源論」の謎を追って—

小谷汪之

一冊の本をめぐる謎から、戦前・戦時下に出版の世界に関わり、したたかに生き抜いた人びとの群像を描く、四六判 定価2730円

二院制議会の 比較政治学

—上院の役割を中心に—

岩崎美紀子

二院制議会を採用する主要諸国の比較分析を通して、日本における参議院のあり方を改めて問う、A5判 定価4935円

図書館と 表現の自由

松井茂記

図書館をめぐる問題をさまざまな場面に分けて、表現の自由の保障のあるべき姿から包括的に検討を加えた、四六判 定価2835円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
(定価は消費税5%込み)

<http://www.iwanami.co.jp/>

友人の紹介もあって晶文社から出版されることになりました。当時、晶文社の編集者だった原浩子さんは、原稿を読むと、編集会議を通さずに独自の判断で本を作ってくださいました。彼女に対しては今もって心から恩義を感じています。その原さんからは、釘を刺されたことがあります。

「四〇代に入ったら、本当に自分がやりたい仕事以外はしてはダメですよ」という一言です。示唆に富んだ、嬉しいアドバイスでした。しかし、現実にはそうもいかず、本当にやりたい仕事は、出版社の採算が合わないなどの理由で実現することができず、苦しんだこともあります。

しかし、私は、編集者と常に二人三脚の気持ちを忘れずに歩んできました。これは偶然かもしれませんが、信頼する編集者とは二度仕事をしました。男女関わりなく、編集者と著者の間には、疑似的な恋愛関係が生じます。岩波書店の中川和夫さん、筑摩書房の谷川孝一さん、平凡社の松井純さんなどです。本を作るという作業は、著者にとつては、それくらいエキスタティックな作業なのですね。映画製作のプロセスで俳優同志がしばしば恋に落ちるのと同じ理由です。

そしてこの間、自分の肝に銘じてきたことがあります。それは、「編集者の顔をよく見る」ということです。編集者は、決して面と向かって悪くは言いません。ですから、「編集者の言葉に浮かれているようではダメ」なのです。本が出るまでのプロセスを、うぶな著者は、知りません。

つい、思い込みが激しくなります。本は、著者が出すものではなく、あくまでも編集者とのコラボレーションによって生まれるものだという認識にたどりつくまでには時間が掛かります。その意味でも、編集者と著者との間には、表面的なものにとどまらない、真の対話的關係が構築されなくてはなりません。そしてそのようにして生まれ出る本こそが、それぞれの人生のなかで意義ある体験として蓄積されていくのだと思います。

ここでひとつ、面白いエピソードを紹介しましょう。二〇〇七年に出た『カラマゾフの兄弟』の翻訳では、最初から編集者との間で、すさまじいといえるくらい親密な対話がなされました。最初に試訳を依頼されたのですが、できあがった原稿用紙一〇〇枚分がけつして質の高いものとはいえず、「もう少し柔らかく」と指摘されて作った二度目の試訳もボツ、ついに三度目の試訳となりました。なぜか、三度目の会議は、御茶ノ水の居酒屋で開かれました。夕方の五時少し前です。居酒屋に向かう途中、「もう駄目かな、私の『カラマゾフの兄弟』は実現しないな」と覚悟していましたが、やはり予想通りのことを言われたわけですね——「決して悪くはないのだが、リズム感がない」「読みにくい」と。そして、議論を交わすなかでハッとさせられたことがあります。担当の編集者が放った、「私たちとしては、先生が目安として意識されてきた新潮社版ではなく、岩波文庫の、一般的には古いといわれる米川正夫さ

んの訳のほうがはるかによいと思っています。はるかにリズム感があります」という言葉です。これには驚き、この一言が大きなヒントとなりました。そのとき私は、「いま息をしている言葉で」というコンセプトの意味を理解したような気がしました。そして四度目の正直ということでも、とにかくにも、リズム、リズムと念じながら、翻訳を続けていきました。

大学出版会と出会う

私は東京外大の学長時代に出版会を設立したこともあって、大学出版会とご縁ができたわけですが、記憶に残る大学出版会の出版物というと、先ずは名古屋大学出版会から出版された『ロシア原初年代記』が挙げられます。国本哲男、中条直樹、山口巖という三人の先生、当時この三人のお顔がオーラのように輝いて見えて、羨ましく思った記憶があります。この本が出版された一九八七年といえますと、私はまだ一冊も本を書くことができず、先ほど紹介した『甕

るフレイブニコフ』の原稿執筆に取り組んでいた時期です。きつとそのせいもあったのでしよう、『ロシア原初年代記』はひととき華やかに輝いて見えました。

それからもうひとつが、東京大学出版会から刊行された『知の技法』ですね。これは端的にいつて、同じ大学人として嫉妬を感じました。東大の小林康夫さんと船曳健夫さんの二人を船頭に、癪にさわるぐらい華やかで知的な議論が繰り広げられていて、しかも、これが東大か、と思わせるほどに、重さ、堅苦しさを感じさせないのです。

今は慶応義塾大学出版会との仕事を約束しています。慶應出版会の宮田昌子さんからの誘いをきっかけに、私がイチ押しソロモン・ヴォルコフによる『シヨスタコーヴィチとスターリン』の翻訳出版を始めようとしているところですが、これがなかなか大変な作業です。

そこで、いよいよ、東京外国語大学出版会の話に移るわけですが、出版会設立の話が出てきたのは、記憶する限り、一九九九年、中嶋嶺雄さんが学長を務められていた時期の

“明治”を知れば“いま”が見える！ 明治時代史 大辞典 全4巻 完結！

第4巻（補遺・付録・索引）**発売**
宮地正人・佐藤能丸・櫻井良樹編
日本人が自ら創造してきた、激動の明治時代を理解するための約9500項目を収載！ **21000円**
1～3巻発売中＝各**29400円**

15代の治世で読み解く江戸時代

徳川歴代 将軍事典

大石 学編 家康から慶喜まで、
將軍の家族・大名・旗本・学者、政策・事件など、約1000項目を収録。
13650円 『内容案内』送呈

日本人にとって「食べること」とは。

民俗小事典 食 shoku 3675円

新谷尚紀・関沢まゆみ編 駅弁・滋養強壮・ダイエット食品・コンビニ・B級グルメ……。食に関する約450項目を解説。『内容案内』送呈

日本の対外関係 全7巻完結

地球的世界の 成立 (最終回配本) 6300円

荒野泰典・石井正敏・村井章介編
[16～17世紀] 地球規模の変動に苦悩する東アジアと日本。新たな国際秩序が形成されるまでを描く。

シリーズ 遊廓社会

●三都と地方都市 **10500円**
佐賀 朝・吉田伸之編 性売買をめぐる「遊廓社会」の実態に迫る！
〈続刊〉●近世から近代へ（仮題）

現代日本政治史

●占領から独立へ 1945-1952
楠 綾子著 講和と安全保障をめぐる戦後8年を描く。（最終回配本）
2730円 シリーズ全5巻完結

吉川弘文館

〒113-0033 東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格5%税込

ことです。正確には東京外大が創立一〇〇年を迎えた翌年のことですが、当時、国立大学はまだ法人化されておらず、出版会は任意団体でつくるしかありませんでした。つまり公費を使うことができないということです。中嶋さんの意志を受けて、私なりに設立プランを練り、同窓会などからの支援によって一五〇〇万円の基金をつくり、当座の運営と事業資金をそれで賄おうと考えました。

繰り返しになりますが、この一九九九年という年は東京外国語大学の創立一〇〇周年にあたっていました。その一〇〇年を記念して『東京外国語大学史』という本が作られ、東京外国語大学出版会という名のもとで出版しました。ところがこの本がけっこう大きな赤字を出したため、出版会の立ち上げどころか、何百部と売れ残った本をあちらこちら持参し、「みなさん、買ってください」と懇願して売り歩くことになったのです。それでも約一〇〇万円の借財が残りましたが、中嶋嶺雄先生に率直に「債務を放棄してください」とお願いしたところ、「いいよ」と潔く放棄してくださったのです。これには本当に救われました。それで全部を清算しましたが、しかし結局のところ出版会を設立できなかったという苦い記憶が残りました。

その後、大学が法人化され、私が二〇〇七年に学長となり、出版会の設立について教授会の承認を得ることになりました。「今、出版業界は苦しいのではないか。なぜ大学で出版会をつくるのだ。」という疑問の声もありましたが、

教授会では、約三分の二の賛成票が集まりました。編集長は岩崎稔教授にお願いしました。そして、准教授一人分の人件費を出版会に充てようということで、当初八〇〇万円の運営事業資金を学長裁量経費で支出し、「五〇〇万円で五冊出してほしい」と、編集者の竹中龍太さんに半ば無理なお願いをしました。このときラインナップされた最初の四点が『ドストエフスキー 共苦する力』（亀山郁夫著）、『身体としての書物』（今福龍太著）、『中上健次と村上春樹』（柴田勝二著）、『直説法で教える日本語』（東京外国語大学編）です。

出版点数は現在までで一六点と非常に少ないのですが、アジアアフリカ言語文化研究所が出している『FIELD+』という雑誌も出版会の事業の一部となっております。また、『ピエリア (Pieria)』という毎年四月発行の小冊子の評判が大変よく、東京外大の入学式の際には新入生に配っています。

大学出版会の個性とは

ところで、大学出版会は、岩波書店など一般の学術出版社とは基本的に何の違いもないと私は考えていますが、そうであるからこそ、大学出版会の目標としてどのような方向を見据えているかが大事になると思います。採算を常に念頭に置かなければならないでしょうが、もしも採算だけを考えるのであれば、人気アニメの出版なども視野に入る

ミシンと日本の近代

消費者の創出

ゴードン シンガーミシンの席巻、モンペを生んだ大戦、60年代の中流意識の膨張。画期的な社会文化史。大島かおり訳 ¥3570

ニューメディアの言語

デジタル時代のアート・デザイン・映画

マノヴィッチ メディア史を横断しつつ、デジタル転換後の視覚文化を詳細に分析。メディア研究の金字塔。堀潤之訳 ¥5670

エイズの起源

ペパン 植民地医療、貧困、売血と売春。ウイルスがたどった驚愕の経路とパンデミックの謎を解く決定版。山本太郎訳 ¥4200

死後に生きる者たち

〈オーストリアの終焉〉前後のウィーン展望

カッチャーリ 帝国の没落と故郷からの離別を創作の契機に変えた芸術家たちへの「哀悼劇」。上村忠男訳 田中純解説 ¥4200

ストロベリー・デイズ

日系アメリカ人強制収容の記憶

ナイワート 戦時下1942年の強制収容体験の貴重なオーラルヒストリー。初公開資料を基に精確に検証。ラッセル秀子訳 ¥4200

プライバシーの新理論

概念と法の再考

ソローヴ 法律、哲学、社会学、心理学におけるプライバシー概念を批判的に検討。最新の理論を提示する。大谷卓史訳 ¥4830

認識問題

〔全4巻・5冊〕

カッシーラー 哲学史の記念碑、全巻完結。須田朗・宮武昭・村岡晋一・山本義隆訳 ①¥8400 ②-1 ¥5775 ②-2 ¥6300 ③¥8400 ④¥7140

東京文京本郷

5丁目32-21

tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)

http://www.ms2.co.jp

みすず書房

一方、学術や文化は売上だけでは測れません。学術出版賞として広く知られる「サントリー学芸賞」を例にとると、どの大学出版会よりも際立っているのが名古屋大学出版会です。名古屋大学出版会は過去五年間に八冊も受賞しています。ちなみに同時期の他の大学出版会は、慶応義塾大学出版会が二冊、東京大学出版会が一冊です。もちろん、学術出版の表彰はサントリー学芸賞に限りませんが、大学出版会のありかたとして、高水準の作品を連発する名古屋大学出版会は、ひとつの理想的なモデルを提供しているといえるのではないのでしょうか。

ベストセラーもいいし、サントリー学芸賞もいい。しか

でしよう。むろん、批判が出ます。そうした安易な路線をとらず、しかも採算をとるという点で、教養に資する内容でありつつもベストセラーとなった作品が、先ほど紹介した東大出版会の『知の技法』『知の論理』『知のモラル』ですね。総計七〇万部が売れているということで、うらやましい限りです。

し、大学出版会は「何を目標としているのか」、「誰のための出版を考えているのか」ということに、常に厳しく自己管理し、注意を払わなくてはなりません。個々の大学のアカデミズムへの貢献、教育への貢献を掲げることが大切なことですが、それが自身の大学の宣伝や成果発表に資するだけではあまりにも志に欠けることになります。

私自身は、平成二〇年二月、学術研究推進部会・人文及び社会科学の振興に関する委員会で報告を行いました。私の発言はウェブ上に載っていますので、関心ある方はご覧いただきたいのですが、私の専攻である文学に即し、人文学の再興のためにということが考えられるのか、思うところを述べたのです。東京外大の出版会を創立したときの経験もあって、学術出版に関わる困難な現状を訴え、国家レベルで出版助成を活性化させるべきだと発言しました。ひとつのアイデアとして、一冊につき二〇〇万円、それを一〇〇〇冊刊行するプロジェクトを国に提案しようとして申し上げたのですが、むろん、現状はそのような方向には

進んでいません。

教養のゆくえ

昨年、日本学術会議が「二一世紀の教養と教養教育」というテーマを打ち出しました。この提言もウェブ上で読むことができますので、ぜひご覧になってください。これは学術会議の責任のもとに作られたテーマですが、文章が非常に難しく分かりにくいという印象を受けます。

私自身もこの会議の分科会に出席して、苦言を呈しました。というのは、「二一世紀の教養と教養教育」のなかに、世代間の葛藤、つまり先ほど述べた三世代間の断絶を克服しようとする視点が欠けているのです。日本学術会議は、ある意味での古い教養主義に固まっていて、現代において教養という概念そのものが曝されている危機感が感じられません。また、教養をきわめてステイシックなものとして捉えており、本来あるべき動的かつ闘争的な知性というものを感ぜさせてくれない。このテーマに従っていくと、世代間における本当の意味での知の交流が可能となるのか、疑問です。

それと同時に申し上げたいのは、日本学術会議の言う「二一世紀」もさることながら、もうひとつ、「三・一一以降」という新しいパラダイムのなかでの教養教育を考えなければならぬということです。もちろん少子高齢化をはじめとする現状の課題もありますが、三・一一によって決定的

に傷ついた私たちの心、私たち日本の国土、そういった問題に積極的に踏み込もうとしない教養は、どんなに立派な理念を掲げて、所詮絵に描いた餅に過ぎなくなります。それはまさに、生きた知、すなわち「知と生命の大地」そのものに関わる問題だといってよいでしょう。

斎藤兆史『教養の力』

最後に、東大の先生である斎藤兆史さんの教養論を紹介したいと思います。斎藤さんの最新著である『教養の力』を最近読んだのですが、とてもよいことが書いてあります。東大の駒場で教えられる教養を通して得られるものは、最終的には次の三つだそうです。

その一は、「知的技術」または「情報処理」能力です。「情報処理」能力と聞くと意外なものとして驚かれるかもしれませんが、情報収集の手段が格段に変化し多様化している現状を鑑みますと、それを選別していく知性が求められるのは当然です。情報をいかに処理していくかという知的技術が、今後の教養に先ず求められるだろうということです。

もうひとつは「バランス感覚」「センス・オブ・プロポーション」です。ただし、私はここに若干不満を感じます。確かにバランス感覚は重要かもしれませんが、教養が真の生きた知性となるためには、私が最初に申し上げた知の裏付けとなる生命そのものの、すなわち情熱とダイナミズムの熱い力がなければ、単なる上っ面なものに終わってしま

います。「センス・オブ・プロポジション」というところに、イギリス文学者としての斎藤さんの資質が表れているのかもしれません。ロシア文学者である私は、むしろプロポジションと非プロポジションとのぎりぎりの地点に息づく「センス・オブ・パッション」とでも呼びたい熱い知性を新しい教養のかたちとして位置づけたいと念じています。斎藤さんが、同時に三つめに挙げているのが、「人格の理念」または「善」です。教養を通して得るもの、あるいは教養というものは、根本的に善くなろうという祈りを持つことでもあるというのが斎藤さんの主張です。これもある種の素晴らしい理想主義と言えます。

私の教養論

それでは最後に、私自身の教養論をかいつままで申し上げますと、折口信夫の言う「類化性能」を涵養していくことが大事だと思います。これは茂木健一郎の主張とはほぼ重なりあいますが、いかに他者との一体感を可能とする想像

力を養うかということです。それは最初、音楽の力によって養い、次は言葉の力を通して養う。非言語的能力をできるだけ鍛えたうえで言語に向かうという、そういうやりかたが必要だと思っています。

加えて申し上げたいことは、「街を捨て、家に帰れ!」。振り返ってみますと、教養と呼ばれるものが培われる場合は、結局は家庭しかないのではないか、と思うのです。母親が子供へ、父親が子供へ、というかたちで問わず語りに伝わっていく見えざる力、本棚に立っている一冊の本、そういったものが知らず知らずのうちに優れた教養を育てる土壌となるのです。帰り道、外でお酒など飲んでいないで、早く帰って子供たちの相手をするのが大事なのかな、と自己反省的に考えております。もともと、そのような認識に立てる年齢に達したころには、子供ももう大きく育っていて、親の話を聞かなくなっている、というのが実情なのでしょうね(笑)。

(二〇一三年五月三一日 学士会館)

内 案 刊 新

喜安朗・北原敦・岡本充弘・谷川稔 編

歴史として、記憶として「社会運動史」
A5判・二五六頁・五〇四〇円

「社会運動史研究会に参加した人々が、その後確立してきた歴史理論の現在の意味を自ら省みた文章で綴る。」

川端浩平 著
四六判・三二〇頁・二九四〇円

ジモトを歩く——身近な世界のエスノグラフィ
ジモトはどこに消えたのか。3・11以降の日本社会を、11以前から問い直し、「夢」をまきおこせる地域社会の条件を考える。

内野光子著

A5判・二八四頁・三九九〇円
天皇の短歌は何を語るのか——現代短歌と天皇制
天皇の故少い直接的な発信手段とみなされる「短歌」がその時々の政治権力とどのように呼応しあったのかについて考える。

今井昭彦 著
菊判・四八〇頁・七九八〇円

反政府軍戦没者の慰霊

戊辰上野の戦い、会津戊辰戦役、西南戦役の戦没者の御霊をアイランドワーク。反政府軍戦没者の慰霊は誰がどのように埋葬処理したのだろうか。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

■ 大学出版部協会創立五〇周年

遙かなる専門書の世界を伝えるために

——営業の日々と役割、そしてこれからのこと

中島久暢

(慶應義塾大学出版会)

大学出版部協会創立五〇周年。その記念すべき年を迎え、今現在、全国の大学生協を中心に大小様々なブックフェアを展開している。専門書の販売を前向きに捉える側と、それを受けて具体的に行動を起こす側の、理解と協力があつてこそ実現できる、素晴らしいものだと感じている。ただ、これは出版団体だからこそ可能な活動であり、個の営業としての行為の結果ではない。

それでは、実際に普段行っている自分自身の営業とは、どういったものなのだろうか。ここではそれを振り返り、そして、これからを考える意味も込めて、瑣末ながら私自身の言葉で営業活動について記そうと思う。

営業の基本は、もちろん書店訪問である。社内会議等で次月あるいは次々月刊行する新刊を決定し、新刊案内を作成。郵送やFAXで全国の書店へ送付し、それだけでは集まり切らない受注を獲得するために訪問。時には、書店の営業本部や外商本部に足を運び、取次会社とも交渉する。図書館や直

販での売り方も考える。年間尋常ではない数の新刊が刊行される中、自社の本の存在を少しでも多くの書店に伝え、少しでも多くの読者の手に届けられるよう、丁寧に、そして真摯に営業していく。日々それを繰り返す。規模の大小に関わらず、これをきちんと行っているかどうか、自分自身ひいては会社組織の「営業力」に繋がっていく。営業とは何かを考える上で、絶対に外すことのできない基本姿勢ではないだろうか。

しかし、ただ繰り返すだけでは先に進めない。奇抜なアイデアは必要ないが、それぞれの本に即した売り方を模索し、常に考え続けることが重要だと確信している。「営業力＝想像力」。営業が先に進むためには、この力を育てることが最も大切であろう。自分自身、まだまだ発展途上だが、営業として経験年数を経るほどに、そのことを痛切に感じるようになっていく。

では、具体的にはどうすればいいのだろう。まず考えられるのは、他社の本を知ること。類書の知識の蓄積が増えれば増えるほど、書店訪問時に話し合う内容は密になる。ただ新刊案内をするだけではなく、その本を取り囲む周辺の話をしっかりと知る。その中で、自分一人では思いも付かなかった方向に話が進むことがある。その結果、何か新しいことができるのではないかと、強く深く好奇心が湧いてくる。その想いを共有できる存在が社内にいれば尚良い。どのような形で実を結ぶかは別としても、このような経験をするのが何より

も大切ではないだろうか。

次に考えられるのは、一歩進んでの成功体験。たとえば、イチョシ本のPOPやパネルを作成し展開すること。小さなことかもしれないが、それが期待通りに受け入れられた時の喜びは、強烈な成功体験になる。フェアやイベントを企画することも、実際にやってみると、その緊張感と高揚感、そして責任感は何物にも代え難い貴重な体験になる。新刊刊行記念フェア、季節フェア、テーマフェア等、フェアには様々なスタイルがあり、たとえ関係のある本が一冊であつても企画することはできる。自分の力でリストを作成し、それを基にしたフェアを行うことができれば、成し遂げた時に感じる充実感もさることながら、類書知識を増やすことにも繋がり、まさに一石二鳥。併せて、可能であるならば、著者によるイベントも同時に開催し、滞りなく運営する。基本的な営業活動に加え、メリハリを付ける意味でも、このようなことを積極的に考え、実現していくことが、営業の糧となっていくのではないだろうか。

当会では本年度に入つて、組織としての営業・個人としての営業、その両面で大きな出来事があつた。前者は、『井筒俊彦全集』の刊行に併せた企画説明会の開催。後者は、『大学生のためのスタディ・スキルズ』フェアの実現である。紙幅の都合上、ここで多くを記述することはできないが、どちらも懸命に取り組み、時間をかけて準備することで実現した、営業冥利に尽きるとともに、営業としての成長にも繋がった

貴重な体験である。とくに「スタディ・スキルズ」フェアでは、自分なりに考え抜いた「大学生のための本の世界」をついに具現化。選書は、学びの基本を知るための入門書、レポート・論文の書き方、プレゼン方法等の手引書、発想や表現力を磨くための教養書等々、約一五〇冊。「学び方が分かれば、勉強はきつと面白くなる」という考えのもと、文系・理系の垣根を越えて手に取ってもらえるような本を、難易度のバランスにも気を配りながら、慎重に組み合わせた。今後、新しい棚作りにつけていけたらという強い想いもあり、良い意味での高揚感が持続している。

表題にも記している通り、専門書の世界は遙か広大で、先を簡単に見透すことはできない。人文・社会科学・理工等々、一口に専門書と言っても、そのジャンルは多岐に亘り、難易度も様々。内容を著者以上に理解することは不可能であり、その本を担当している編集者にも遠く及ばない。では、営業が存在する理由はどこにあるのか。それはやはり、「伝えること」のみにあると思う。書店に対して、その向こうにいる読者に対して、専門書の魅力を分かりやすい言葉で伝える。より映える見せ方を模索する。その方法は時代とともに変化していくが、根底は絶対に揺るがないはずである。困難なこともかもしれないが、専門書の難解さを誰よりも楽しみ、理解しようとする努力し、常に新鮮な気持ちで営業に臨むこと。この気持ちさえ抱き続けることができれば、道は必ず開けていくと確信している。

書評で読者を広げる——ブックフェア「レビュー合戦」を企画して

澤畑 星

(東京大学出版会)

二〇一二年の九月から十二月にかけて、全国約五〇の書店で「レビュー合戦」なるブックフェアが開催された。当フェアは、白水社、みすず書房、東京大学出版会の三出版社が企画・提案したものである。開催期間中にフェアのようすが朝日新聞でとりあげられ、また、フェア書籍の売上も上々であったから、当フェアは一応の成功をみたといつてよいだろう。本稿では、そのフェアの発案から結果までを簡単に紹介したい。

発案（テーマ）

みすず書房、白水社、東京大学出版会の三社は、二〇一一年十二月より「パブリッシャーズ・レビュー」というタブロイド版の情報紙を発行している。各社の新刊紹介や、営業部により、識者による書評などを掲載していて、一般読者から好評を得ているものである。その「パブリッシャ

ーズ・レビュー」を発行している三社で書店店頭でも何かできないか、そう考えたのが当フェアの発端であった。

フェアのテーマについてさんざん頭を悩ませたものの、それこそ灯台もと暗し、最終的には「パブリッシャーズ・レビュー」という名称から着想を得た。「パブリッシャーズ・レビュー」、直訳すれば「出版者による書評」——そうだが、出版社どうして書評合戦をすればいいじゃないか、という具合である。こうして「レビュー合戦」の輪郭がみえてきた。

企画の具体化（選書と拡材）

わたしがフェアを企画する際、明確に意識していることが三つある。それは、（１）テーマ、（２）選書、（３）拡材（店頭での拡販材料）、という三つの条件である。たとえフェアのテーマがおもしろくても、そこに並んでいる本

藤原書店

岡田英弘著作集(全8巻)

第1巻 歴史とは何か (発売)

岡田英弘 各国史をのり超え、前人未踏の「世界史」の地平を切り拓いた歴史家の集大成。《推薦》M・エリオット／川勝平太ほか 3990円

横井小楠研究

源了圓 世界を見据えた「公共」の思想を唱導し、維新の志士に多大な影響を与えた、小楠の核心とは何か。第一人者による集大成。 9975円

横井小楠の弟子たち

熊本実学派の人々

花立三郎 徳富一敬ら門第8名の人物像と業績を初めて掘り起こし、「横井小楠山脈」の全貌に迫る。 8925円

親鸞から親鸞へ(新版)

現代文明へのまなざし

野間宏・三國連太郎 戦後文学の巨人と稀代の怪傑が映画「親鸞・白い道」をめぐって大熱論。 2730円

ロング・マルシュ 長く歩く

アナトリア横断

B・オリヴィエ 歩くことは、自分を像つめること。シルクロード単独踏破。 内藤伸夫・渡辺純訳 3360円

●われわれが失ってきたものとは何か?

学芸総誌
季刊

歴史
環境
文明

vol. 54 2013年夏号

《特集》日本の「原風景」とは何か

石牟礼道子／中村良夫・桑子敏雄・三浦展／赤坂憲雄／上田篤／A・ベルクほか

《特集》「石牟礼道子全集 不知火(本巻完結)町田康ほか《対談:「生命と人間」中村桂子＋木下晋《連載:川勝平太連載対談:日本を変える! 2)山折哲彦《連載:石井洋二郎》山田登世子ほか《連載:金子兜太ほか 3780円

月刊
機

B6変32頁 8月号 No.257
黒岩重人／上田正昭／志村三代子／B・ケルナー＝ハインケル／M・エリオット／川勝平太／新元博文／松尾文夫／加藤晴久／尾形明子／山崎陽子ほか

年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド呈 ※表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

が魅力的でなければどうしようもない。また、そもそも店頭でお客様の目を引くためには、それなりの飾り付けが必要だろう。というように、魅力あるフェアを展開するためには、(2)と(3)の条件もとても大切だと考えている。

選書に関しては、各社担当者で議論をしているうちにも、いろいろなアイデアが出てきた。せっかく「合戦」と謳っているのだから、この本とあの本、このレビューとあのレビューというように、対の構造をつくっていいこうというのだ。しかも、ふだん店頭では一緒に並べられないような本を、内容的な結びつきを明らかにしながら対にしてみたらどうだろうか。そんな思惑から、たとえば「激動の時代と政治思想」という小テーマを設けて、高山裕二「トクヴィルの憂鬱」(白水社)と渡辺浩「日本政治思想史」(東京大学出版会)を組み合わせることにした。

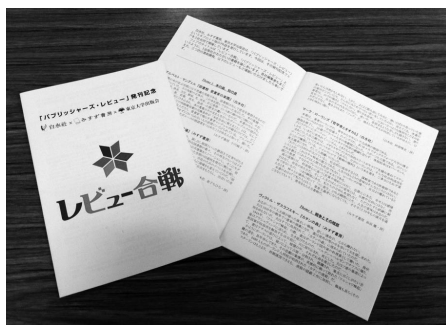
また今回のフェアでは、抜材の役割も重要だった。フェアの目玉であるレビューを、どうやってアピールしたらいいか。これまた議論の結果、店頭用のPOPとリーフレット

(小冊子)を作成し、そこにすべてのレビューを掲載することにした。あとで述べるように、後者のリーフレットがとくに好評を博し、お客様を店頭と呼びこむ一因にもなった。

書店への案内と話題づくり

さて、企画が具体的にになったら、次は書店への案内と話題づくりである。

「レビュー合戦」という企画に自信がなかったわけではないが、書店の反応はこちらの予想を上回るものだった。まずは五〇の書店に限定して案内をしたところ、なんと四八の書店がフェア開催を快諾してくれた。また、その案内の過程で、書店担当者から貴重な意見を頂戴することもできた。そのひとつが、「各社の編集者たちがレビューをしているという点を、もっと前面に押し出したほうがいいのでは」という意見である。実際、わたしたちはこの意見にしたがい、以後そのアピールポイントを各方面で利用して



好評を博したフェアのリーフレット（小冊子）

いくことになる。

そのアピールポイントがとくに功を奏したのが、朝日新聞の取材記事においてであろう。今回のフェア開催にあたっては新聞社などへも積極的に案内をし、おかげでフェアの紹介記事がいくつ掲載された。そして、そのなかでもとくに効果的だったのが、朝日新聞の取材記事である。「真剣レビュー合戦」と題されたその手がけた本を正面から書評し合う。そんな試みが小冊子『レビュー合戦』にまとまった。朝日新聞の記者も、各社編集者がレビューをしあうというその点に、このフェアのおもしろさを認めたわけである。

そして、そんな記事の掲載が、書店店頭での動きを活性化させた。それ以前からもフェアの実売はまずまずであったが、しかし他方で、「朝日新聞の記事が出てから本が動くようになった」という書店も少なくなかった。さらに、もうひとつうれしかったのが、レビューが掲載されているリーフレットを求めてお客様が書店に足を運んでくれたこ



ジュンク堂書店池袋本店のようす。当店では各社書籍を追加した「拡大版」で展開した。

とである。結局、リーフレットは大好評、うれしい誤算で増刷することになった。

結果と今後の課題

では、フェアの結果はどうだったのだろうか。

すでに触れたように、店頭での実売は上々だった。ここで具体的な数字を示すことはできないが、ほかのフェア企画と比べても実売率はわるくない。とりわけ今回のフェア書籍には三〇〇〇円台の既刊書も多く含まれていたから、それでその数字を出せたことは価値あることと考えてよいだろう。

また、書店別の売上に目を転じてみると、タロー書房（東京都中央区）、海文堂書店（兵庫県神戸市）、今井書店グループセンター店（島根県松江市）の活躍が光った。その三店はいずれも中規模の店舗であるが、地域に根づいた書店

自滅する中国

なぜ世界帝国になれないのか

E・ルトワック

奥山真司監訳

中国を知り尽くした戦略家が戦略的ロジックを使って、中国の台頭がいかに自滅的なものかを解説した異色の中国論。アメリカ・日本・韓国をはじめ各国の中国への対応にも言及。二〇一二年末刊行書の完訳本。中国問題の本質を知る最良の書。

【増刷出来】2415円

東京都文京区本郷3-3-13 (税込)
☎03-3813-4466 FAX03-3813-4615

である（海文堂書店は残念ながら今年の九月に閉店）。そうしたお店でも超大型書店に肩を並べる成績をあげられたことは、わたしたちにとっても励みになるところである。

もうひとつ、うれしい報告があった。いささか内輪の話になるが、各社の社内で今回の取り組みが好意的に受けとめられたというのである。編集者を中心にレビュー執筆者には少なからぬ負担をかけてしまったが、それでも多くの方は快く協力してくれたらしい。「編集と営業で一緒に取り組めてよかった」と、まさかそんな感想まで頂戴できるとは思っていなかったが。

というように、一応の成功をみた「レビュー合戦」フェアであるが、じつは今後についても考えていないわけではない。各社の担当者レベルでは、来年か再来年に第二回を開催したいと考えている。そしてそのときには、今回課題として浮かび上がってきたことを実現できたらと思う。最後に、その課題についてふたつだけ言及しておこう。

第一の課題は、レビューのさらなる活用である。今回の

フェアが注目を集めたのはほかならぬレビューのおかげであるが、しかしそうであるなら、その使用を書店店頭に限定しておくのはもったいないだろう。むしろ、ネットなどでもさらに活用して、店頭での使用と連動できたらと思う。

第二の課題は、他メディアとのさらなる連携である。今回のフェアではいくつかの紹介記事が掲載されたが、次回は今回の実績を前提として、事前から他メディアと一緒に何かできないかとも考えている。今回実感したように、店頭での売上を伸ばすためにも、そうした連携はぜひとも必要はずだ。

以上ふたつの課題を指摘して、本稿でのレポートを終えることにしたい。なお、本稿の文責はわたしにあるが、当フェアの企画はすべて白水社の田代健氏、みずず書房の飯島康氏とともに進めてきたものである。

学問の面白さを読者へ——名古屋大学出版会・橘宗吾氏に聞く

【解説】橘宗吾氏は、一九六三年生まれ、京都大学文学部卒、一九八九年に名古屋大学出版会に入社し、現在、常務理事兼編集部長。

名古屋大学出版会は、名古屋大学をはじめとする中部圏の大学の研究成果の出版を柱に、一九八二年に設立された。スタッフは一〇名規模に過ぎないが、話題作・受賞作は数多く、いまや日本の学術出版を牽引する存在である。亀山先生の記念講演にもあるように、最近五年間を数えてもサントリー学芸賞に八作品、日経・経済図書

——最初に、名古屋大学出版会の出版活動について教えてくださいいただけますか。

現在スタッフは編集六名、総務・営業四名の計一〇名です。名古屋大学の職員ということではなく、人件費も含めてあらゆる経費を完全な独立採算で賄っています。

文化賞に四作品、大佛次郎賞、日本学士院賞などの受賞歴を誇り、他の追隨を許さない。

橘氏は、その快進撃を支える編集者である。企画はどのようにして生まれるのか、原稿はどのように読んでいるのかなど、優れた編集手腕の秘訣を聞いた。信念を曲げずに突き進んでいく日々の奮闘から、学べきことは多いと思う。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・構成 東京大学出版会・山田秀樹）

ここ数年の年間出版点数は約三〇点で、当面、無理のないこの刊行点数を維持したいと思っています。出版分野は人文学から社会科学、また医学を含む自然科学とオールラウンドですが、刊行点数は人文学・社会科学が多いですね。日本の大学出版部の組織形態はさまざまで、名古屋大学出版会の場合、評議員・理事に名古屋大学と近隣の大学の

先生方になっていただいています。知的な、あるいは精神的なバックアップはとても大きなものだと思います。その下に我々実働のスタッフがいるというかたちです。

——そのなかで橘さんはどのような役割を担われているのでしょうか。

組織のなかでの位置づけとしては常務理事・編集部長という役職に就いていますが、同時に一編集者としての仕事もしています。企画を立てて、原稿を書いてもらって、それを本にしていくということです。

東大出版会の竹中英俊さんが言われていたように、役職業務の方は「兼愛」、すなわちある種のバランスが求められますが、編集者業務の方は「偏愛」、すなわち惚れ込んで思い入れて仕事をしていく要素が抜き難くありますね。

企画が生まれるまで

——今日は、「偏愛」の方、すなわち橘さんの編集活動に焦点を当ててお聞きしたいと思いますが、企画は具体的にどのようなように生まれてくるのですか。

ごく普通のことですが、読んだり会ったりするなかからです。「犬も歩けば企画に当たる」くらいのつもりで、いままでお付き合いのある著者、あるいは今後著者になりそ

うな人に会い、話を聞きます。そしてそのためには少なくともその人の書いたものを必ず読んでいきます。もちろん原稿やゲラと向き合うことも大切になっていますが、デスクワークばかりになってしまうと、なんとなく気持ちが悪くなってきましたね。ただ、学会や研究会などにはあまり行かず、基本的には一対一で会って、じっくり話を聞かせていただくというかたちが性に合っているようです。

——名古屋という立地条件をどのように捉えていますか。東京や京都などと比較すると大学数が少ないので、気軽に訪問できる研究者も限られてくると思いますが。

たしかに、名古屋に限定すると、研究者の層は薄いと思います。ある一つの分野に数多く研究者がいるという状況ではないでしょう。ですから、どうしても活動の範囲を広げざるをえず、東京や関西などにもよく出掛けます。

ただ、そういう場合でも、結果的に名古屋コネクションが生きてくることもあります。名古屋圏の研究者は、地元出身でそのまま名古屋で長く勤められる方もいらつしやいますが、他の地域から名古屋に赴任され、また他の地域に出ていかれる方も多いのです。それは残念なことですが、積極的に捉えれば、名古屋時代に築いた繋がりが広がっていくことでもあります。

——企画を立てる、原稿を判断するときの方針、あるいは心掛けていることはありますか。

簡単に答えにくい質問ですね(笑)。敢えて言えば、「原稿第一主義」でしょうか。あちこちに出掛けて行って先生方といろんな話をさせていただいて企画が生まれてくるのですが、途中のプランがどれだけよく出来ていても、あるいは、研究会などでの著者の発表がどれだけ素晴らしくても、やはり最終的な原稿が、つまり読者に示すものがよく書けているかどうかが勝負だと思って、そこを中心に考えます。ちなみに、編集者は「第一読者」だとよく言われますが、純然たる読者というわけではありません。しかし、そうした読者の目線も持つようにして考えるわけです。

執筆途中の原稿に意見を求められることもあります、著者がよほど行き詰っている時でなければ、まず著者として精いっぱい書き上げたものを読ませてください、とお願ひします。その代わり、書き上げられた原稿は、それこそ「一期一会」のつもりで読む。時間がかかりますけどね。

その際、少し遠くから徐々にその原稿の中心へ近づいていくときの感覚を大切にします。どうやって読者がこの本に近づいてくるのかを、自分の心身を介して知るためです。

——「原稿第一主義」という点では、橘さんの仕事ぶりを傍目で拝見し、あるいは著者などから聞くところによ

ると、こうすればもっと良くなるんじゃないか、こうして欲しいという感想・要望を臆せず積極的に伝えていますね。

そう心掛けています。もちろん、いつでも意見をいろいろと思いつくわけではありませんが、僅かでも言えることがあるときはきちんと言うのが仕事だと思っていますし、それを言わなかったら、仕事として何をやっているか分からないでしょう。ですから、それは一番大事にしている部分です。以前、編集者の役割の一つは、著者を「挑発」して、いい原稿を書いてもらうことだと申しましたが(『挑発』Ⅱ媒介としての編集)『大学出版』八八号)、そのために編集者が自分の感じたことをぶつけていくのはとても重要です。

編集者は特定の学問分野の専門家ではありませんが、そうであるからこそ言えることもあるわけです。専門家が専門分野の中からは言えないことや、多くの分野に関わる編集者であるがゆえに見えて言えることがあるはずです。もちろん、編集者の感じたことがいつも正しいというわけではないのですが、その意見を著者に一種の「発見法」として利用していただくことはできます。いや、「発見法」としてすら使えなくても、執筆の方向や論点の、いわば「確認」のために利用していただくだけでもいいのです。

「挑発」というのは出版上の恩師の故後藤郁夫さん(元

名古屋大学出版会専務理事兼編集部長」の言葉ですが、おもえば、その後藤さんに拾ってもらって入社してすぐの時期、著者に会いに行く、「名古屋大学出版会ってまだつぶれてなかったの?」「そんなものは知らん」とよく言われました。存在を認められていないところに自分は入ったんだって思ったものです。ですから、自分が担当した本が出来上がったとき、自社のアピールも兼ねて、自分がつくった本はこんなに面白いのどにかく読んでほしいと、お会いする先生ごとに言っていました。

この、面白いから読んでほしいというのは、企画の段階にせよ本が出来てからにせよ、編集という仕事の原点だと思いますが、それを言うためにも、著者や原稿と「つき合っ」て、つまり編集者の心身をくぐらせて、この点は引っかけるとか、素晴らしいとか、これを書いていただけなのかとか、著者に伝え、自信と責任を持って出版できる作品にしていくなければなりません。

付け加えますと、本を読むことで人生がしょっちゅう変わるのではないにしても、我々編集者は、時折とてつもない企画や原稿に出会ってクラクラするような衝撃を受けることがあります。そしてよく分からずに途方に暮れ、しかし時間をかけて理解に努め、徐々に本に仕上げていくなかでその衝撃を讀者に伝えることを仕事の醍醐味としているわけです。そうであれば、それを著者たちにも伝えることは、それ自体が「挑発」になり、仕事の種ともなるのです。

——その「挑発」に乗っていただけじゃない方、あるいはその「挑発」が引き金となってトラブルが発生してしまうこともありそうですが。

ありますね。著者と意見が異なることもありますし、あるいはその場では背いていただいたものの実際の原稿にはほとんど反映されないこともあります。

それはしかたのない部分と、そうではない部分があると思います。先ほど言いましたように、自分の意見がいつも正しいと思っているわけではさらさらなのですが、あるレベル——読者の目線のレベル——に関しては、普通に読む、あるいは読んだ人がこう思うであろうことを意見として言っているだけなのです。ですから、特殊な修正を要求しているつもりはなくて、論理的におかしいところはおかしいと言って整えてもらおう、あるいは文章展開を踏まえればごそつと抜けていると思われる部分は足していただくなど、普通に読者の状態で読めば気づくであろうことを申し上げているのです。そのうえで、著者の見解と突き合せ、例えば資料がないので加筆にも限界があるということであれば、ではどうしようかと相談していくことになります。とにかく編集者としてしっかり意見を伝えていくことは、学術書を、限定された専門家の範囲だけでなく、隣接領域を含む「関心をもつ読者」に開いていくためにはとても大切なことでしょう。

橘流「編集活動」とは

——ご自身の編集活動の特徴はどのあたりにあるとお考えでしょうか。

これも難しい（笑）。著者から「厳しい」と言われることもありますが、実際は優しいんですよ（笑）。自分が話を聞いたり原稿を読んで面白いと思ったことを、いかに魅力的なものとして読者に届けていくかという前向きなスタイルですし、大家の先生の推薦や予想売行部数の多さだけで判断せずに、原稿内容そのものを重視していますから。

ただ、非専門家である自分の感覚だけに頼ると独りよがりの判断になる危険がありますので、専門の先生方に意見や評価を、とりわけ本音を引き出すかたちでお伺いしています。そして、専門家の評価と、自分が面白い、あるいは何か引っかけかと思った部分を突き合わせ、そのうえで出版の可否や方向を判断します。もちろん、企画は社内の会議や理事会でも検討します。だから、いたって普通なのですが、自分の感覚を大切にしつつ、それを一度相対化して、その上でもう一度判断するということを、しっかり意識して実行することが大事だと思っています。

もう一つ言えば、固定しがちな分野を越境していく内容に面白さを感じるところがあります。これは、私の特徴というより、一人の編集者がいろいろな分野の作品に取り組

まざるを得ない我々の小所帯ゆえの特性を、積極的に生かそうとしているということでもあります。

——いままでの経歴のなかで、自分らしさが表れた担当作品を具体的に紹介していただけますか。

三つほど紹介したいと思いますが、一つは、分野を跨いでつくった作品と言える、齋藤希史先生の『漢文脈の近代——清末Ⅱ明治の文学圏』です。

この本をつくるきっかけは、その前に出版した籠谷直人先生の『アジア国際通商秩序と近代日本』にありました。これは当初名古屋市立大学に勤務されていた籠谷先生の単著ですが、幕末・維新期に日本が開国した際、「黒船」に代表される欧米勢力だけではなく、ジャンク船に乗って中国人商人も数多く来航し、それが近代日本の経済史に大きなインパクトをもたらしたことを明らかにした労作です。

私はもともと文学に関心がありましたから、はたして文学でも同じような問題があるのか、いや、あるんじゃないかと思って、探し始めました。そこから齋藤先生の論文を見つけ、当時奈良女子大学にお勤めだった先生にお会いしたわけです。実際には単純なアナロジーではうまくいかなかったのですが、ともかく手掛けていた作品から着想を得て、研究している人を探して会い、自分の考えを一生懸命伝え、曲折を経ながらも、いい本が出版できました。

続いて、同一人物のなかでテーマを跨いでいった例として、伊勢田哲治先生の『動物からの倫理学入門』を挙げたいと思います。伊勢田先生は最近まで名古屋大学にお勤めでしたが、赴任したところ、『疑似科学と科学の哲学』という、科学哲学についての入門書を書いていただいています。二セの科学と真正の科学をどうしたら区別できるのか、その「線引き問題」といわれるものを使って、科学哲学のさまざまな問題を考えたロングセラーです。

その伊勢田先生に新しい本を書いてほしいと思っていたとき、「動物倫理」という、動物に対してどうすれば倫理的な扱い・振る舞いができるかを論じる分野があることを知りました。ちょうど翻訳などを含めて本がいくつか出始めていた時期ですし、伊勢田先生も論文を書かれていましたが、それをストレートに扱えば二番煎じになりそうでしたので、工夫が必要でした。しばらく考えあぐねていましたが、ふと、『疑似科学と科学の哲学』で扱った「線引き問題」を使うことで、つまり動物の倫理と人間の倫理をどう区別できるのかを考えることで、逆に動物倫理を使って人間の倫理学を再構築するかたちで本が書けるのではないか、と思いついたのです。さっそく先生に自分の考えをぶつけてみたところ、興味を示され、目次はスムーズに出来上がりました。その後の原稿までは時間がかかり、目次構成も当初のものから修正されるのですが、力作が出来上がりました。先ほどの『漢文脈の近代』が「籠谷先生から齋

藤先生へ」という流れだとしますと、『動物からの倫理学入門』は「伊勢田先生から伊勢田先生へ」の流れと言えますね。

三つ目は、岡本隆司先生の『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』です。これはどちらかというと、私が主体的に仕掛けたものではなく、つき合いの流れのなかで生まれたものです。この作品はサブタイトルに「近代清韓関係」とあるように、中国と朝鮮半島の関係を扱っています。「日朝」関係あるいは「日中」関係の研究は数多くありますが、なぜか「清韓」関係というものはあまり見られない。当時の東アジアの秩序を考えれば、そこがないということはあり得ないわけですが、死角となって見落とされていたのです。岡本先生はそこに着目して論文を書かれ、お会いしたときにたまたまその話をされました。即座に「それは面白い！」と申し上げたことが、『属国と自主のあいだ』刊行へと繋がりました。

このときは言うなれば「流され戦法」です。こちらから予めテーマを設定して原稿依頼するのではなく、著者の構想に寄り添い、流されて流されて、最終的に本にたどり着くやり方です。もっとも、これは私自身のコントロールを消極的にしか及ぼさずに著者の思うままに「流される」わけですから、心から信頼できる著者でなければ取り得ない戦法です。それがうまく行って画期的な本が生まれました。

——ご自身の編集活動全般につき、気を付けていることはありますか。

自己模倣に陥らないように注意しています。経験を重ねて企画や原稿を判断する目（心身）を鍛えることは大事ですが、得意分野のようなものができてしまうと、それに偏りがちです。人は自分を模倣しますから、その壁は意識的に突破しなくてはなりません。本の作り方についても同じです。うまくいっているとき人はそれを変えたりしません。むしろ新しいものを見て更に良くしていくという気持ちです。知らぬ間に自己模倣のサイクルに入ってしまう、狭い世界に閉じこもってしまうのは怖いことです。

——自己模倣に陥らないようにするには、具体的にはどうすれば良いのでしょうか。

企画活動という点では、新しい分野の著者と会うことだと思います。むしろそれしかないと思うんですよ。無理やりにでもいいので、例えば、たまたま知り合いになった人でも面白いことを言っていたら、「もうちょっと聞かせてください」と言って詳しく話を聞く、あるいは、たまたま読んだものが面白かったら会って詳しく話を聞く、ということ。最初は意味が分からないこともあるでしょうが、話を聞いて学んでいくうちに、こんな脈脈があったんだ、

学問的にこんな動きがあるんだ、と気づかされ、自分の視野も広がっていくと思います。

大学出版部の編集活動について

——最後に、他の大学出版部の出版活動について感じるところをお聞かせください。

母体大学への短絡的な貢献が言われますが、普遍性をもった面白い本を読んでもらうことを第一に考えて編集すべきです。それによつていい形で本が読まれ、その結果として母体大学への貢献になるという間接性が本来の姿ではないでしょうか。これは著者に対するスタンスと同じです。それには、編集者はじめ出版する側が本当に面白いと思う、原稿をしっかりと読んで出版するしかありません。

そうしていかないと、普遍性への感覚も「面白い」と感じる力もなくなってしまう。それでは結果的に、読者が読んでも手ごたえのない本になるだけですから、各々事情はあつても、ここは編集者が頑張る以外にありません。

それに、きちんと編集して、いい作品に仕上げれば、販売部数も、倍増はしないとしても、プラス一〇〇部は可能となり、それは学術書出版社の利益にとって大きなものです。そうなれば、粗製濫造に陥らずに、クオリティーの高い本をつくるための手間ヒマをかけられるわけです。その好循環の方向に絶えず力を働かせていく必要があると思います。

大学出版部ニュース

●第三一回日本・韓国大学出版部協会合同セミナーの開催

六月一九日から二一日まで、韓国ソウル市・メイフィールドホテルにおいて、第三一回日本・韓国大学出版部協会合同セミナーが開催された。日本側の代表団は黒田拓也理事長以下九校一三名で、初日の歓迎晩餐会、代表者会議のあと、二日目は統一主題の発表と企画成功事例の報告があった。日本からは慶應義塾大学出版部・小磯勝人氏が「デジタル化の潮流に大学出版部はどう向き合っていくべきか」、韓国からは慶北大学校出版部・金容勳氏が「私たちの皆が愛するものの未来」と題して、それぞれ主題報告された。

●二〇一三年度大学出版部協会夏季研修会の開催

八月二九、三〇日の二日間、千代田区・アルカディア市ヶ谷（私学会館）で第四〇回大学出版部協会夏季研修会が開かれた。今年には協会創立五〇周年を念頭に、初日は「大学出版部の発展と経営」を全体会のテーマに掲げ、協会内部（加盟各出版部）を省察する研修会になった。事

前アンケートを基に、前半は黒田拓也氏（東京大学出版部）と鈴木哲也氏（京都大学学術出版部）が報告に立ち、後半の全体討論では黒田氏がコーディネーターになって、地方からの参加者などの意見を細部まで掘り起こしていった。

二日目は、丸善&ジュンク堂書店営業本部の大内達也氏が演壇に立ち、「出版の物流を考える」と題して講演を行った。物流は今やこの業界の重要テーマであるが、大内氏から新しい物流の仕組み（SRC）について詳細な説明があった。図書販売の現場でいかにして最少の適正在庫を持ちえるか、その工夫と努力がうかがえ、質疑応答も含めて一時間半の持ち時間があつたという間に過ぎた。

他にも第三一回日本・韓国大学出版部協会合同セミナー、第二〇回東京国際ブックフェア、創立五〇周年記念連続シンポジウム等について、それぞれの担当者から報告された。今年の研修会はめずらしく都内での開催ということもあって、例年とはまた違った形と雰囲気会の研修会として参加者に深く印象づけられた。

北海道大学出版部

▼佐々木利和著『アイヌ史の時代へー余瀝抄』（A5判・五二五〇円）アイヌ民族の歴史・文化について文献史学の方法に立脚した個別論考を収録。「北大アイヌ・先住民研究センター叢書3」

▼帰山雅秀・永田光博・中川大介編著『サケ学大全』（A5判・二五二〇円）様々な視点からサケ科魚類の生活とそれらを取りまく環境との関係を説明する。

▼木野田君公・高見澤今朝雄・伊藤誠夫著『日本産マルハナバチ図鑑』（四六判・一八九〇円）五五〇枚を超える生態と標本写真で全5亜属15種・6亜種を紹介する。

▼山下善平著『新装版 里山の昆虫たちーその生活と環境』（B5判・二九四〇円）里山の昆虫の生態を、六〇〇枚ものカラー写真と親しみやすい文章で案内する。

▼小林快次著『ワニと恐竜の共存ー巨大ワニと恐竜の世界』（A4判・一〇五〇円）2億3千万年におよぶ歴史を多数の図や写真を使ってやさしく紹介。

▼ニールハウゼン著／渡邊昭子他訳『総覧東欧ロシア史学』（B5判・一〇五〇〇円）古代から現代にいたる東欧・ロシア10カ国の歴史学の歩みを包括。

弘前大学出版会

▼『弘大ブックレットNo.10 津軽から発信！ 国際緊急医療援助に生きる 朝日茂樹医師のJDR活動編』弘前大学文学部柑本英雄ゼミブックレット編集委員会編（A5判・八二頁・定価六三〇円）学部学生編集による「津軽から発信！」シリーズの二冊目。講演記録や日記等の資料に補足インタビューを加え、国際緊急医療援助のプロフェッショナルとしての朝日医師の生き方を明らかにしている。



▼『十年間の歩み―弘前大学第十二代学長 遠藤正彦原稿集―』弘前大学学長秘書室編（A5判・三五〇頁・定価四二〇〇円）歴代秘書六人の編集による、第十二代弘前大学学長・遠藤正彦氏と弘前大学の十年間の軌跡。

東北大学出版会

▼東北大学高等教育開発推進センター編『高等教育ライブラリ5 植民地時代の文化と教育―朝鮮・台湾と日本―』（A5判・一七八五頁）、『高等教育ライブラリ6 大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―』（A5判・二二〇〇頁）、『高等教育ライブラリ7 大学教員の能力―形成から開発へ―』（同前）

▼小原豊志・三瓶弘喜編『西洋近代における分権的統合 その歴史的課題―比較地域統合史研究に向けて―』（A5判・四二〇〇頁）

▼上條謙二郎著『ロケットターボポンプの研究―開発―35年間の思い出―』（A5判・二六二五頁）

▼東北大学大学院文学研究科出版企画委員会編『人文社会科学講演シリーズVI 男と女の文化史』（四六判・一三二〇頁）

▼川崎健著『Regime Shift―Fish and Climate Change―』（A5判変型・三六七五頁）

▼福岡路著『ハйтеク・クラスターの形成とローカル・イニシアティブ テキサス州オースティンの奇跡はなぜ起こったのか』（A5判・五二五〇頁）

流通経済大学出版会

▼『スポーツの世界を学ぶ―スポーツ健康科学入門―』流通経済大学スポーツ健康科学部ゼミ運営委員会（A5判・一〇六頁・一〇五〇円）

スポーツといってもその世界は実に多様である。本書はその多様なスポーツの世界を「コーチング」「スポーツ医学」「健康スポーツ」「アスレティックトレーニング」「スポーツバイオメカニクス」「スポーツ人類学」「スポーツ教育学」「スポーツ政策」「スポーツマネジメント」「スポーツ情報戦略」の分野から、入門書として基本的なことをわかりやすく解説した。将来スポーツの現場で活躍したいと考えている学生諸君に、最初に手に取って読んでほしい本である。



聖学院大学出版会

▼聖学院大学出版会会長に阿久戸光晴

出版会発足時より会長を務めてまいりました大木英夫に代わり、阿久戸光晴（学校法人聖学院理事長・院長、聖学院大学学長）が四月一日、会長に就任いたしました。よろしくお願い申し上げます。

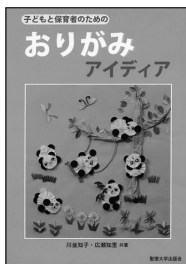
▼石川到寛・柏木昭著「福祉の役わり・福祉のこころ6」「いま、ここで」のかわり」（A5判七三五円）石川到寛「宗教と福祉——仏教福祉の立場から」、柏木昭「人間福祉スーパージョン」を所収。共感から出発して寄り添い、協働していく福祉の姿勢が語られている。

▼聖学院キリスト教センター編「神を仰ぎ、人に仕う——キリスト教概論 改訂21世紀版」（A5判二〇五円）現代においてキリスト教の福音を知りたいと願う人のための入門書（新共同訳聖書使用）。

▼近刊 窪寺俊之編著「スピリチュアルケアを学ぶ4」「スピリチュアルケアの実現に向けて——第18回日本臨床死生学会大会の取り組み」大会の四つのシンポジウムで発表された多職種の方々の論稿を収録。明日の臨床に役立つ日本のスピリチュアルケアの構築・実現を目指す。

聖徳大学出版会

▼川並知子・広瀬知里共著『子どもと保育者のためのおりがみアイデア』（B5判・一二八頁・一五七五円）幼児が無理なく折り紙遊びを楽しめる方法や「折る」だけで、簡単に折り紙を三等分や五等分・六等分にできる技法も取り上げられた。新たな折り紙の魅力に気づける一冊。



▼川並知子著『さくら紙あそび』（B5判・六四頁・六八二円）「さくら紙」（おはな紙）の遊び方別に構成し、作品の活用例もふんだんに掲載。親子での紙遊びから保育現場での活用など、ぜひ手本としてさくら紙あそびを楽しんで欲しい。



麗澤大学出版会

▼原島一男『映画のなかのちよつといい英語』（A5変型判・二二八頁・二五二〇円）英米の映画（第三の男」「ローマの休日」から「ET」「タイタニック」まで）から選び抜いた名せりふを教材に、ベーシックな、自然な、そしてオシャレな表現や単語を楽しく学べるユニークな英語学習書。英語、映画、人生の楽しさを、奥深さを味わう本。

▼J・クリシユナムルティ著／中川正生訳『愛について、孤独について』（四六判・二五六頁・二九四〇円）現代のプラトニッククリシユナムルティ（一八九五—一九八六）の「対話篇」。生、死、快楽、苦しみ、悲しみ、恐れ、情熱、美、自由、そして愛と孤独——人生のあらゆる問題について、根源から問いかけ、ともに考える。迷いから目覚め、生きる勇氣を与える一冊。



慶應義塾大学出版会

- ▼『井筒俊彦全集 第一巻 アラビア哲学』（四六判・五三六頁・六三〇〇円）一九三五年から一九四八年の間に発表された井筒俊彦の初期作品群を収録。散文詩「びろそびあはいこおん」から、古典言語論、初期代表作『アラビア哲学』まで、井筒哲学の原石が光る全集第一弾。生誕百年を迎える今、井筒俊彦の日本語による全著作を発表年月日順に収録する初の本格的全集。ギリシア哲学からイスラーム哲学、インド哲学、老荘思想、仏教、禅までをも含めた人類の叡知を、有機的統一体として読み解き、東洋哲学と西洋哲学の対話を目指した井筒俊彦。その思索の原点から構築への道程を辿る。単行本未収録の著作も網羅し、各著作の書誌情報と執筆背景を説明する解題を収録。別巻には、未発表作品、著作目録、総索引、年譜（若松英輔執筆）を収録。各巻に多彩な執筆陣による月報、第九巻には貴重な講演音声CDの附録が付く。
- 【税込価格帯】六三〇〇円〜八一九〇円。
- 【近刊】第二巻『神秘哲学』（二〇月）、第三巻『ロシアの人間』（二二月）。

ケンブリッジ大学出版局

- ▼The Cambridge History of the First World War 3 Volume HB Set
(3 HBS 9781107660588 二〇一四年一月二〇日までの特別価格USD 380
二〇一四年一月二二日以降USD 450)
『ケンブリッジ版 第一次世界大戦史』の三巻セット。
個別の巻でもお求め頂けます。
- Volume 1: Global War
(HB 9780521763851 USD 150)
Volume 2: The State
(HB 9780521766531 USD 150)
Volume 3: Civil Society
(HB 9780521766845 USD 150)
- ▼B・ロンボルグ編の待望の新刊
Global Problems, Smart Solutions,
Costs and Benefits
『世界規模の問題とスマート・ソリューション』
(PB 9781107612211 USD 49.99)
- How Much have Global Problems Cost the World?, A Scorecard from 1900 to 2050
『世界的規模の問題解決とそのコスト』
(PB 9781107679337 USD 34.99)



産業能率大学出版部

- ▼『マーケティング活用―3つの発想・7つの手法』小島吉四郎・山本元共著（A5判・一八九〇円）マーケティングの知識・理論を活用して、自分の職場でそれをどう実践・活用していくかを解説。
- ▼『成功への設計図 超起業読本』齋藤聡著（A5判・一八九〇円）起業に関する不安・恐れに対して、起業が成功までの道しるべとなる地図を指し示す。
- ▼『社会人のための伝える力―人の心に伝わるということ』荒巻基文著（四六判・一四七〇円）人に自分を伝えることについて、そのメカニズムを科学的に分析し、「どうすれば伝わるのか」を技術的に解説。
- ▼『社会人のための問題解決力―自分で考え行動するということ』日沖健著（四六判・一四七〇円）問題解決について、生活・職場などの多くの場面を用いながら、問題解決の真の姿を学んでいく。
- ▼『社会人のための考える力―自分のまわりをポジティブにかえる』浅岡孝光著・日沖健監修（四六判・一四七〇円）一歩引いた視点から考え、効率的に答えにたどりつくための手法を伝授。

専修大学出版局

▼麻島昭一著『戦前期三井物産の投資と金融』（A5判・四〇八頁・四八三〇円）

三井物産の創業期から大正期にかけての有価証券、不動産、船舶、鉱山などの諸投資の内容を解明し、その資金調達における銀行取引の実態を解明する。また国内外の各支店での金融の枠組みや資金調達についても、調査分析している。そのため著者は二度渡米して、国立アメリカ公文書館所蔵文書から大量の関係文書を探索してきた。膨大な史資料の数値が掲載されており、本書はそういった研究努力の賜である。

▼根間弘海著『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』（A5判・三〇二頁・二九四〇円）

画像資料と関係者への取材により、大相撲の歴史に隠れた謎を解説する。特に独自の発展をした南部相撲を取り上げ、江戸相撲や吉田司家との関係を考察する。他に座布団投げ、触れ太鼓、土俵の屋根、など。姉妹書に『大相撲行司の伝統と変化』（二〇一〇年発行、三七八〇円）『大相撲行司の軍配房と土俵』（二〇一二年発行、三三六〇円）がある。

大正大学出版会

▼『交響頌偈「釈迦」』伊福部昭作曲・片山杜秀・勝崎裕彦解説（B4判・一五〇頁・六九三〇円）

本書は来年生誕100年を迎える作曲家伊福部昭の自筆楽譜の復刻である。

片山（慶應義塾大学法学部教授）の解説によれば、伊福部家の系譜は大己貴命まで遡れる由緒ある家系で、明治のはじめまで神職を務め、家学は『老子』であったそうだ。

「勉強したり理詰めで考えたりすれば何か分かったら、できると思ったら大間違いだ」と「倣ってはならない」伊福部の人智を超えたものへの畏敬、あるいは現代文明への警鐘は、釈迦の出家、成道（悟りに至るまで）、釈迦への讃歌という三楽章よりなる楽曲にもあらわれている。

また、勝崎（大正大学学長）の仏教解説によって、より深く楽曲を味わうことが可能となる。ぜひ付属CDをお聴き頂きたい。賢しらに小事をこなすのではなく大事を見する人に必聴・必読の書。

玉川大学出版部

▼金子元久著『大学教育の再構築―学生を成長させる大学へ』（A5判上製・二四四頁・三九九〇円）根本的な見直しが迫られている大学教育改革を改めて捉え直す一冊。大学の教育と学習の大規模な調査結果を多角的に分析し、再構築の展望を探る。専門的知識の獲得を通じて自己を確立する体系的な教育プログラムや、職業能力の取得と大学授業のあり方についての具体的な考察や提言は必見。変貌する社会や企業に対応した、「成長の場」としての大学像を示す。

▼中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編『大学のI R Q & A』（A5判並製・二二二頁・二二〇〇円）教育活動や経営活動の改善、外部評価への対応等、大学の重要な意思決定を支援するI Rの業務をQ & A形式で解説。データの収集・分析から分析結果の報告・提案まで、I Rの知識・技能を「学生の受け入れ」や「研究活動」といったテーマ別に具体的に紹介する。I R基礎用語や効果的なグラフの選び方等の関係資料も充実。I R実践の最適化対応策を、関心をもったテーマから効率よく学べる。

中央大学出版部

▼佐々木信夫著『大都市行政とガバナンス』（三五七〇円）単に府県と大都市の二重行政の是正や一元化、大都市に対する国・県の二重監督の解消といった旧来の「大都市の特例」のレベルではなく、明確に大都市を府県（州）区域の権限外と位置づけた、大都市制度の創設と「大都市制度法」の制定を強く説いた改革の指針書。実務家にも最適な好书。

▼高橋由明著『企業経済学の基礎―企業目的、歴史と理論、方法』（三七八〇円）株主価値最大化がいつから企業目的となったか、ジェンセン（エイジェンシー理論）、フォードとGMスローン、バーナードとディーンズの企業目的の比較。チャンドラーの「組織と戦略」、「Visible Hand」における経営史と経営学の関係、ドイツ経営学方法論とポパー、ハーバーマス、ロレンツエンの哲学との関係を考察。

▼小林 勉著『地域活性化のポリティクス』（二七三〇円）住民による新たな地域活性化の方途をスポーツの事例に探り、スポーツ実践の向こう側に描かれる地域デザインの理想と現実に迫る。スポーツを「学問」したい人にとって必読の書。

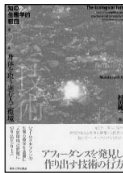
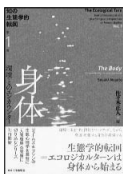
東京大学出版会

▼村田純一・佐々木正人・河野哲也・染谷昌義編『知の生態学的転回』（全三巻、A5判、1、2巻三七八〇円、3巻三九〇〇円）ジェームズ・ギブソンの生態心理学を基盤に「人間環境」の問題に切り込むシリーズ。

第1巻『身体 環境とのエンカウンター』（佐々木正人編）は、身体研究の最新線を紹介しつつ、生態心理学の哲学的ルーツを論じて広大な身体―環境系を探索する。

第2巻『技術 身体を取り囲む人工環境』（村田純一編）は、人間―「技術的環境」内存在のあり方を、最適なアフオーダーダンスを導出するための技術の多様な実践例から浮かび上がらせる。

第3巻『倫理 人類のアフォーダンス』（河野哲也編）は、エコロジカルな倫理学を構想するために、社会的コミュニケーションにおけるギブソン理論の可能性を探索する。



東京電機大学出版局

▼ヘンリー・オットー著／出口博二、田上雅照、高橋文博 監訳『詳解EMC工学―実践ノイズ低減技法』（B5・六四八頁・九九七五円）

二十年ぶりの大改訂！現在の最新技術に即した形で解説。電子機器の設計者には欠かせない知識と技術について、理論的な説明から実践的な説明までを一冊にまとめた。原著者はEMC分野の第一人者。

▼高田伸彦、南俊博著『情報ネットワーク教科書』（A5・三七六頁・三九九〇円）情報ネットワークの概念や基礎的な事項に関し、専門的な知識がなくても理解できるように丁寧に解説した一冊。ネットワークの成り立ちから、次世代技術までの技術動向が分かる。ネットワークが我々の社会や暮らしをどのように支え、今後どのように変えていくかを、豊富な図や表で分かりやすく解説し、初学者の理解を助ける一冊。



法政大学出版局

▼押村高著『国家のパラドクス』（三三六〇円）一つの国に一つの国民という国家観が再考を迫られる一方で、ナショナリズム言説も復活している。こうしたパラドクスの原因を探りその解明を試みる。

▼鵜飼健史著『人民主権について』（三一五〇円）政治を私たちの手に取り戻すために、主権、主権者、ポピュリズム、代表などの政治的な概念との対話を重ねながら人民主権概念を再考する。

▼磯前順一著『闇の思考』（六九三〇円）自分の居場所がない。ポストコロナリアル思想はそこに一つの道を示す。他者を排除せず、「戸惑い」と「受苦」を絆とする共同性の創出を震災以降に構想する。

▼P・リクール／久米博他訳『道徳から応用倫理へ』（三六七五円）晩年の著者が現代世界の倫理問題が顕在化する場としての裁判と医療に光をあて、実践的な応用倫理の領域へと歩みを進めた記録。

▼F・D・セバー／合田正人訳『限界の試練』（四九三五円）現象学の彼方をめざす現代フランス哲学の風景を独自の角度から俯瞰し、主観性というトラウマ的経験の限界にとどまる倫理を問う画期作。

武蔵野大学出版会

▼舞田敏彦著『教育の使命と実態——データからみた教育社会学試論——』（A5判・四三〇頁・二九四〇円）

著者の『47都道府県の子どもたち』、『47都道府県の青年たち』に続く、統計から論じる教育社会学の著作第三弾である。今回は、わが国の教育のあり方について真つ向から取り組む。本書の特徴は、公開の統計データから客観的に示そうとしている点である。時とともに少しずつ歪んできたかに見える教育の実態を、データ分析と表現の様々な手法によって明らかにする。近代の学校教育は、生まれに関係なく能力に応じて個々の子どもが社会移動を図ることを可能にした。一方、学校は不平等の進行を巧みな形で隠蔽する装置として機能する危険性を併せ持つ。格差の再生産と生きづらさを増す社会の諸相を、子ども、家庭、学校、教師、青年、社会の切り口から観察して描き出す。



武蔵野美術大学出版局

▼『新しい生活指導と進路指導』高橋陽一＋伊東毅編 高橋陽一＋川村肇＋伊東毅＋渡辺典子＋奈須恵子著（A5判、二二四頁、一九九五円）

小学校一年生から発生する学級崩壊や、あとを絶たないいじめなど、現在学校を取り巻く諸問題は深刻な状況にある。このような中で学校は、そして教師は、生活指導・進路指導を通して何ができるのか。また、子どもたちの今と未来に、いかに希望をもたせ得るのか。

最新の法令や政策動向を押さえながら、生活指導・進路指導を行う上で必要な知識と視点を、これからの教育を担う未来の教師たちに提供することを意図して本書は編まれている。

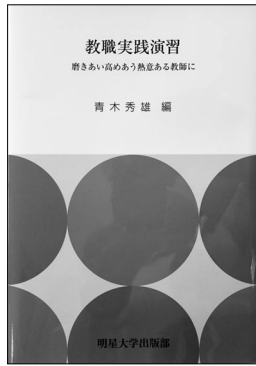
第1章・生活指導とは何か、第2章・進路指導とは何か、第3章・生活指導と進路指導の法律と政策、第4章・不登校、第5章・いじめ、第6章・ジェンダーと学校、第7章・多文化教育と学校、第8章・学級崩壊。以上のような章立てで、生活指導・進路指導の歴史や定義、実態、そして課題を明らかにするとともに、期待されるその機能とあり方を提言する。

明星大学出版部

▼『教職実践演習 磨きあい高めあう熱意ある教師に』青木秀雄編

(A5判・二七二頁・二二〇〇円)

これから教員になろうとするに当たって、自らの資質能力を教職課程の勉強と教育実習の研鑽によって高めることができたら——厳しい自覚の下に成果を確認し深化させる学習テキスト。



▼『教育原理』佐々井・樋口・廣嶋著

(A5判・一九〇頁・一四七〇円)

▼『第2版 子ども達の発達と環境—児童心理学序説』塚田紘一著

(A5判・二九八頁・二四一五円)

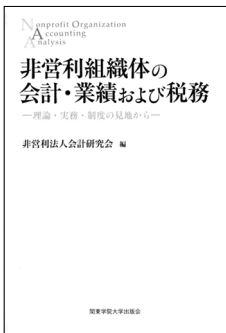
▼『心の科学—基礎から学ぶ心理学』林洋一監修 本多明生・大原貴弘編

(A5判・二三四頁・一九九五円)

関東学院大学出版会

▼非常利法人会計研究会編『非常利組織体の会計・業績および税務—理論・実務・制度の見地から』(A5判・二七六頁・二七三〇円)非常利組織においては、経営管理・外部報告いずれの目的にも役立つべき会計がその役割を果たし得ていない。

縦割り行政を背景に主務官庁主導で整備・運用されてきた会計制度が混乱の原因である。会計が非常利組織の活動を支援するものとなるためには、シンプルで普遍的な理論・技術・制度構築が必要である。本書はその手掛かりを得ることを目的とし、非常利組織会計基準の整備過程・現状そして課題を整理している。



▼近刊・兒玉幹夫著『福祉の理念と社会学』(A5判・二二六頁・二九四〇円)

東海大学出版会

▼『野生のオランウータンを追いかけて—マレーシアに生きる世界最大の樹上生活者—フイルドの生物学』①金森朝子著(B6判・二二八頁・定価二二〇〇円)

／果実をお腹いっぱい食べるのは数年に一度だけ。そのほとんどを樹上で生活し、葉っぱや樹皮を食べて生きるオランウータンの知られざる生態を紹介する。著者は高校卒業後、野生動物を求めて単身アフリカへ渡ったことがきっかけで研究者をめざし、紆余曲折を経て成長しながら、研究者として独り立ちするまでの姿も描いていく。

▼『クマが樹に登ると—クマからはじまる森のつながり—フイルドの生物学』②小池伸介著(B6判・二四〇頁・定価二一〇〇円)／私たちに身近な存在である一方、農作物や畜産物に被害を与え、迷惑者とされるクマであるが、意外にその生態はわかっていない。その食性と種子散布者としての役割に注目し、クマと果実と糞と森の不思議な繋がりを描く。

名古屋大学出版会

▼『ローマ政治家伝』全三巻
第Ⅰ巻 カエサル 第Ⅱ巻 ポンペイウス
M・ゲルツァー著／長谷川博隆訳（各四
八三〇円） 大政治家とは何か——。ロー
マ社会全体を見据えた叙述により、世界
史上の転換点をそれぞれの視点からヴィ
ヴィッドに描き出す。

▼『ヨーロッパ政治思想の誕生』将基面
貴巳著（五七七五円） 権力と相互依存、
暴政と同意など、聖俗の間から湧き起こ
った、「政治」をめぐる新たな思考は、
いかなる特質をもち、どのように展開し
たのか。明快に描く。

▼『アメリカ福音派の変容と政治——一九
六〇年代からの政党再編成——』飯山雅史
著（六九三〇円） 宗教右派が呼び起し
た政治的うねりはどれほどの力をもつて
きたのか。エピソードで語られがちな政
治と宗教の関係を統計分析により把握。

▼『高齢者の痛みケア』Y・ダーシー著
／波多野敬・熊谷幸治郎監訳／山口佳子
訳（二八三五円） 高齢者の痛みをどうケ
アするか。痛みのとらえ方や鎮痛薬の用
い方などについて述べた医療や介護の場
で使える実践的な一冊。

三重大学出版会

大人の仕事シリーズ・3
『サクラマスの飼育手帳』魚住一三著、
新書判九六頁、定価九〇〇円。
▲目次▼

- 1、著者について
 - 2、サクラマスの現状と生活史
 - 3、サクラマスの養殖指導Ⅰ
（1）養殖の道具類 （2）養殖の施
設・設備 （3）わき水の取得
 - 4、サクラマスの養殖指導Ⅱ
あ）親マスの捕獲 い）採卵・受精
う）未受精卵の選別 え）給餌
お）養殖の施設設備の図解
か）飼料関係 き）養殖適地
く）成長 け）販売 こ）病気
さ）配合飼料の動向
し）必要な諸道具類とその価格
 - 5、参考文献
 - 6、要点テスト・・・（1）～（15）
 - 7、サクラマス（ヤマメ）養殖活動日誌
- 産卵後二年で川から海に回降し、カム
チャツカ半島近海を回遊して、二年程度
で故郷の川に帰る。現在は富山・新潟・
山形沿岸で稀に捕獲される貴重魚種の飼
育手帳。水産系学生、水産高校生用。

京都大学学術出版会

▼廣田襄著『現代化学史—原子・分子の
科学の発展』（三九九〇円） 現代の科学
技術の発展は、物質の理解なくしてはあ
り得ない。古代エジプトに始まった「物
質の科学」は、いかに拡大し、どこへ向
かうのか。20世紀の飛躍的進歩に重点を
置き、物理・化学・生物の枠を越えて現
代化学のダイナミックな歴史を辿る初の
成書。●野依良治氏、益川敏英氏推薦。

▼松田素二・鄭根埴編『コリアン・ディ
アスポラと東アジア社会』（三七八〇円）
戦間期の日本帝国による植民地支配、戦
後東アジアにおける暴力的冷戦構造、ま
た冷戦後のグローバル新自由主義的秩序
——相次ぐ社会構造の変動は奔流のよう
な人びとの移動を生んだ。生存を賭けた
共同性の創造／想像。

▼松岡譲・吉田護編『人間安全保障工学』
（三七八〇円） 単一の学問領域、トップ
ダウン型の画一的な施策では、都市が抱
える諸問題を丸ごと解決することはでき
ない。領域越境的な発想と徹底した現場
主義、多様なアクターの参加に焦点をあ
てた、都市の人間安全保障を確保するた
めの新しいパラダイム。

大阪経済法科大学出版部

▼『未来を発信する八尾 環山楼市民塾二〇二二』（A5版・一五七五円）

【目次】

ごあいさつ 環山楼市民塾運営実行委員会 委員長 柳本 忠二

第一章 日本経済の現状と展望——今後の経済財政運営の課題—— 本間 正明

第二章 レーザーの医療応用

河島 信樹

第三章「地域市民塾の可能性」

初谷 勇

第四章 高度情報化社会に生きる——現代社会を情報の側面から捉え、その意味を考える—— 能塚 正義

第五章 EUと「東アジア共同体」

藤本和貴夫

あとがき 環山楼市民塾運営実行委員会 副委員長 岩村 等



大阪大学出版会

▼菅真城著『大学アーカイブズの世界』（四四一〇円）国立大学アーカイブズの

設立からその業務、大学の自己点検・評価として教育研究といった社会的使命と理論を、大学図書館での研究から書き下ろす。▼大村敬一著『カナダ・イヌイトの民族誌 日常実践のダイナミクス』（七二四〇円）イヌイト独自のナビゲーション装置や知識、技術といった能力を

「日常実践の創造力」と名付け、従来の人類学の立つ「客観性」と「科学性」を本質主義として批判し、イヌイトと生活をもにすることでその文化の内在的な記述を目指す。▼菅沼克昭著『鉛フリーはんだ付け入門』（二六二五円）最新の鉛フリーはんだ付けに用いられる材料と実装信頼性を中心に、新たに解明された事象を盛り込み、最先端の実装材料・技術を出来るだけ系統的に理解できるように執筆。▼橋爪節也・加藤瑞穂編著『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術 焼け跡から万博前夜まで』（二五二〇円）一九五〇年代から六〇年代、大阪がヴァイタリティに満ちていた時代の前衛的な芸術活動を振り返る。カラー図版多数掲載。

関西大学出版部

▼河村厚著『存在・感情・政治——スピノザへの政治心理学的接近——』（A5判・三八八五円）スピノザの倫理学と政治学をコナトゥスと「感情の模倣」を中心的基軸に据えて現実主義（リアリズム）の観点から考察する。附論でディープエコロジーなどの道徳性発達理論とスピノザの関係についても考察する。

▼大西正曹著『中小企業再生の道——東大坂三〇年歩いて見たもの——』（A5判・三一五〇円）日本の中小企業は、厳しい内外の経済環境に直面して、この三〇年間大きく変貌を遂げてきた。本書は中小企業経営者から「まいど教授」の愛称で親しまれている著者の、三〇年に及ぶ東大阪を中心にした探訪記である。

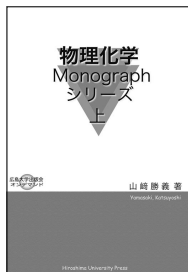
▼奥田隆一著『英語語法学をめざして』（A5判・二三六〇円）本書では、英語の様々な語法現象をより広い観点から整理し、体系的に捉え直す「英語語法学」というものを初めて提示している。様々な英語表現を言語学・英語学的に考察し直し、体系的にどうとらえるかを、研究手法・考察のポイントなど取り上げながら、具体例を用いて紹介する。

関西学院大学出版会

- ▼三原博光・松本百合美編著『豊かな老後生活を目指した高齢者介護支援―保健医療福祉の連携より』（A5並製・二二〇頁・定価二一〇〇円）
- ▼唐沢敬著『世界経済 危機と発展の構図―新しい政治秩序とシステム構築への視点』（A5並製・二四二頁・定価二四一五円）
- ▼石原俊彦監訳『地方公共サービスのイノベーションとガバナンス―行政サービス提供体制と住民自治体制の強化をめざす』（A5並製・三〇〇頁・定価三一五〇円）
- ▼井上雅夫著『カノッサへの道―歴史とロマン』（A5並製・三三二頁・定価四四一〇円）
- ▼關谷武司・大迫正弘・三好崇弘著『グローバル人材に贈るプロジェクトマネジメント』（A5並製・二四四頁・定価二六二五円）入門レベルの読者に考え方をツールを紹介
- ▼関西学院大学災害復興制度研究所・高麗大学校日本研究センター共編『東日本大震災と日本―韓国からみた3.11』（A5並製・二八八頁・定価三七八〇円）

広島大学出版会

- ▼『物理化学 Monograph シリーズ 上下』（広島大学出版会オンデマンド）山崎勝義著（A4変型版・上・四百頁・一七八〇円 下・四四五頁・一八九〇円）
Monograph（＝特定の限られた分野をテーマとする解説あるいは研究論文）の言葉どおり、物理化学の特定の事項についての疑問点を攻略するシリーズ。著者自身が抱いた疑問や誤解の経験を示し、解決目標を明確にした上で、著者がどのような「武器」を用いてどのように疑問を「攻略」したかという「体験談」を記した解説書。
- 「知の共有」の観点から、広島大学学術情報リポジトリにて無料電子公開し、年間を通して高いアクセス数を誇っていたもので、冊子体を望む声に答え、広島大学出版会オンデマンドにより上・下二冊同時刊行。



九州大学出版会

- ▼清水孝純『「白痴」を読む―ドストエフスキーとニヒリズム』（四六判・三三六〇円） 共苦の十字架を背負い、無限の無垢に生きる―世界文学史上、最も美しく謎めいた人物像にして、ドストエフスキー文学の天才の結晶、キリスト公爵ムイシキンの魂の遍歴を解説する。
- ▼清水満『フイヒテの社会哲学』（A5判・八一九〇円）フイヒテの社会哲学の全貌を明らかにし、彼が狂信的ナショナリストではなく、その思想の核心が共和主義と多数の「小社会」による社会革命にあったことを示す。第四回九州大学出版会・学術図書刊行助成対象作。
- ▼幸節雄二『液体ロケットの構造システム設計』（A5判・三九九〇円）筆者の四十年間にわたる開発・研究に基づく液体ロケット設計の手引き。
- ▼実積寿也『通信産業の経済学2.0』（A5判・三五七〇円）現代社会に不可欠なインフラである通信産業エコシステムの経済的特異性を、専門的知識を有しない社会人や通信経済学を学ぼうとする学生を対象に平易に解説する。

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員社名簿

【50音順】2013年9月30日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
岡本出版送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	〒100-0004 東京都千代田区大手町2-6-2 日本ビル10階
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社クイックス	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
株式会社桑川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニツク株式会社	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
東光整版印刷株式会社	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15
株式会社トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 19F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
誠製本株式会社	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒104-8243 東京都中央区銀座6-17-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

岩波書店	〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
吉川弘文館	〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-8
みすず書房	〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
御茶の水書房	〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
藤原書店	〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
芙蓉書房出版	〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-13

AFP SPECIAL SELECTION (英語版)



世界のメディアに配信された AFP 通信の厳選コンテンツ集

[AFP 学術データベースシリーズ] IV

AFP 通信が世界に配信した トップニュース 2012

監修 山田健太 [専修大学文学部 人文・ジャーナリズム学科 教授]

2012 年の写真ニュース、動画ニュースを月別に紹介。2013 年 1 ~ 3 月の最新ニュースも収蔵。

全て記事タイトルは日本語、記事本文は英語。動画は全文スク립ト付き。

[全2巻セット] 写真記事 699 点 / 動画記事 366 点



●「AFP 通信が世界に配信したトップニュース 2012」

写真記事 438 点 動画記事 211 点

●「AFP 通信が世界に配信したトップニュース 2012 Japanese Topics」

2012 年 1 月から 2013 年 3 月までの AFP 配信ニュースから、日本関連の記事を、監修の山田健太教授による項目建てで紹介。写真記事 261 点 動画記事 155 点

「世界の目」を通して、日本そして地球上のニュースがどのように報じられているかを知る機会がもてることは、大変幸せである。それは、事象を判断する物差し国際水準を知る一つのきっかけでもあるし、日本を相対化し自らの拠って立つ現在位置を確認する作業でもあるからだ。

この DVD が、多くの一般市民、とりわけ若い学生諸君の手にとってもらえることで、AFP ニュースに接し、日本のメディアが報じる以外の違った価値観を感じてもらえることを期待

したい。それはまさに、ニュースを読む力をつけるという意味で「情報リテラシー」にも通じるし、目の前の物事に対し「考える力」をつける第一歩だと思うからだ。

小冊子 解説 「AFP が見た 2012 年の『世界』」より
専修大学文学部 人文・ジャーナリズム学科 教授 山田健太

[動作環境] ■ Windows の場合 OS: Windows XP (SP2 以降) / Vista / Windows 7・8 (日本語版) ■ Macintosh の場合 OS: Mac OS X 10.4 以降 (家庭用 DVD プレイヤーではご利用出来ません)

■ 図書館でご購入される場合 価格 231,000 円 (税込)

■ 教育、研究機関に所属する教職員の方々ご購入される場合価格 38,850 円 (税込)

[お問合わせ・お申込み]

学校法人文化学園アカデミックアーカイブセンター 〒151-8521 東京都渋谷区代々木 3-22-1 F 館 4 階

E-mail : info@afpwaa.com

Tel : 0120(021)311

一般社団法人
大学出版部協会
加盟出版部一覽

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1
弘前大学附属図書館内
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL: 0297-60-1167 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局
〒140-0002 品川区東品川1-32-5
TEL: 03-5479-7295 FAX: 03-5479-8277

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12
サピアタワー9階
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-8
TEL: 03-3263-4230 FAX: 03-3263-4288

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL: 03-3918-7311 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会
〒113-8654 文京区本郷7-3-1
東京大学構内
TEL: 03-3811-8814 FAX: 03-3812-6958

東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎1F
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL: 045-786-5906 FAX: 045-786-2932

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35
東海大学同窓会館3階
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-5087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市江戸橋2-174
三重大学附属病院5階
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL: 072-941-9129 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL: 082-424-6226 FAX: 082-424-6211

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172

大学出版96号（2013年秋）
2013年10月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：
一般社団法人大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北
1丁目14番13号
メゾン萬六403号室

TEL: 03-3511-2091
E-MAIL: mail@ajup-net.com
URL: http://www.ajup-net.com/

—

使用書体：
A1明朝
Garamond Classico, Regular
使用紙：
紀州の色上質 特厚口 びわ

—

表紙デザイン：
白井敬尚形成事務所